

水源池の連想

水源池通りは北郷四丁目に始まり、真駒内東町に至る都市整備道路である。学生時代になじんだこの名前だが、私たちが知るのは道路の一区間にすぎない。しかも興味深いことに、起点付近には札幌養護学校が所在し、途中、かつこう幼稚園や札幌大学、小中学校を経過して、終点には真駒内養護学校があることから、いわば教育に縁の深い沿線と言える。全区間は三〇分間ほどで走行できるが、おおよそ住宅街を通り抜けることになり、一戸建てや集合住宅、商店、飲食店、銀行などが軒を連ねる。だが、昭和世代にとってはむしろ月寒公園の忠霊塔、西岡八幡宮の鳥居、沼田公園の築山、西岡水源池の木立の方が記憶に鮮明かもしれない。西岡水源池は明治に月寒川をせき止め



て軍用水路を築いたのが始まりである。戦後に月寒水道局が運用を引き継ぎ、その後昭和五二年からは都市型自然公園に生まれ変わっている。散策者は湖面越しに望む恵庭岳を愛し、四阿で静かな時間を楽しむ。夏には虫取り網を手にした子どもが駆け回る。子ども同士が群れをなすこともあれば、子の足に後れを取る家族連れを見かけることもある。アマチュア写真家もまたひんぱんにすれ違う。野鳥撮影に特化した大型レンズがいやでも目を引く。超望遠レンズは一本五〇万円もする。小生には高嶺の花で、持てる人が少々うらやましい。愛犬家も湖畔散歩を楽しんでいる。犬はせわしなく動き回る。反応の仕方、機敏さが街頭とは格段に違う。犬はここで野生を思い出したよ

山田 隆
やまだ たかし



うに生き返っている。

水源池の水深は四メートル足らずというが、ここには多種多様な魚が棲む。ワカサギにウグイ、ヤツメ、どじょう、トゲウオ、ヤマメ、モツゴ、そして図体の大きな鯉。ずっと以前から「えさをやらないでください」「魚釣り禁止」の掲示が立っているが、凍結した湖面に靴の跡を発見することがある。鴨を押しつけてパンに食らいつく鯉の群れに驚く人なら、水面下の獲物をつい想像せずにはいられないのかもしれない。あるいは貝沼先生が翻訳したアクサーコフの『釣魚雑筆』を思い出すのも一興である。大小豊富な生態系に支えられ、公園周辺では食物連鎖の循環が保たれているらしい。水源池はもちろん、閉じられた生物環境ではない。鳥類、とりわけ水鳥の種類が豊かであり、これがよそから飛来してくる。専門員の観察によると、ア行からヤ行までのリストに一三〇種類の鳥が並んでいる。トリ、とり、鳥。黒田家に降嫁した紀宮様が、双眼鏡を手にお越しくださるくらい有名な飛来地である。

水源池はれっきとした心霊スポットで

ある。雑誌にも、ネットにも関連記事が掲載され、入水自殺を取り沙汰したり、木立の首つりを書きたてる。しかも靈感の強い人は樹上にその姿を認めるという。夜の独り歩きは街中でも危ないが、西岡公園もまた控えた方がいいのらしい。いささか困ったことに、小生は中学時代から天文ファンである。暗くならないところの趣味は成立しない。暗ければ暗いほど、



観測成果が向上する仕掛けになっている。自然公園には街灯や民家の光が直接当たらないため、そして自宅から一キロの近距離にあるため、貴重な観測地点であるのだが、冷静な観測を心霊に邪魔されなために、普段はやや離れた西岡丘陵地でおこなうことにしている。丘陵地には自衛隊の演習地やゴルフ場が点在するが、街灯は皆無であり、したがって夜は真っ暗闇、わけても天文ショーの宝庫、南天の視野が保証されている。天文家はこのような場所をこよなく愛する。

札幌大学に触れておこう。私たちの学び舎であり、そこには青春の一時期、思い出がぎっしりと詰まっている。卒業して四〇年が流れても、なお気になる場所であり続ける。かつては五〇人だった学生定員は、今や一九人であり、こぢんまりとした所帯になった。出身地は遠く福岡や愛媛、道内なら根室や帯広などが居並び、今なお躍動的な進路方向を感じさせる。進学動機としてロシア文化への憧憬や会話能力の養成を挙げる傾向にあり、ロシア文学への情熱はすっかり影を潜めている。進路は多岐に及び、外務省や海上保安庁、警察官、商社マンなど。国際結婚に踏み切る卒業生が時々いて、頼もしい。「いいか、君たち、国際結婚はゆめ



ゆめ考えるではないぞ」と恩師からアドバイスされたのが懐かしい。「若いときはなんの問題もないだろうが、年老いてくると、ボルシチだの、味噌汁だの、どの民族的な違いがやはり現れてくる。」これを承知の上で結婚に踏み切るなら、十分に賢明と言えよう。

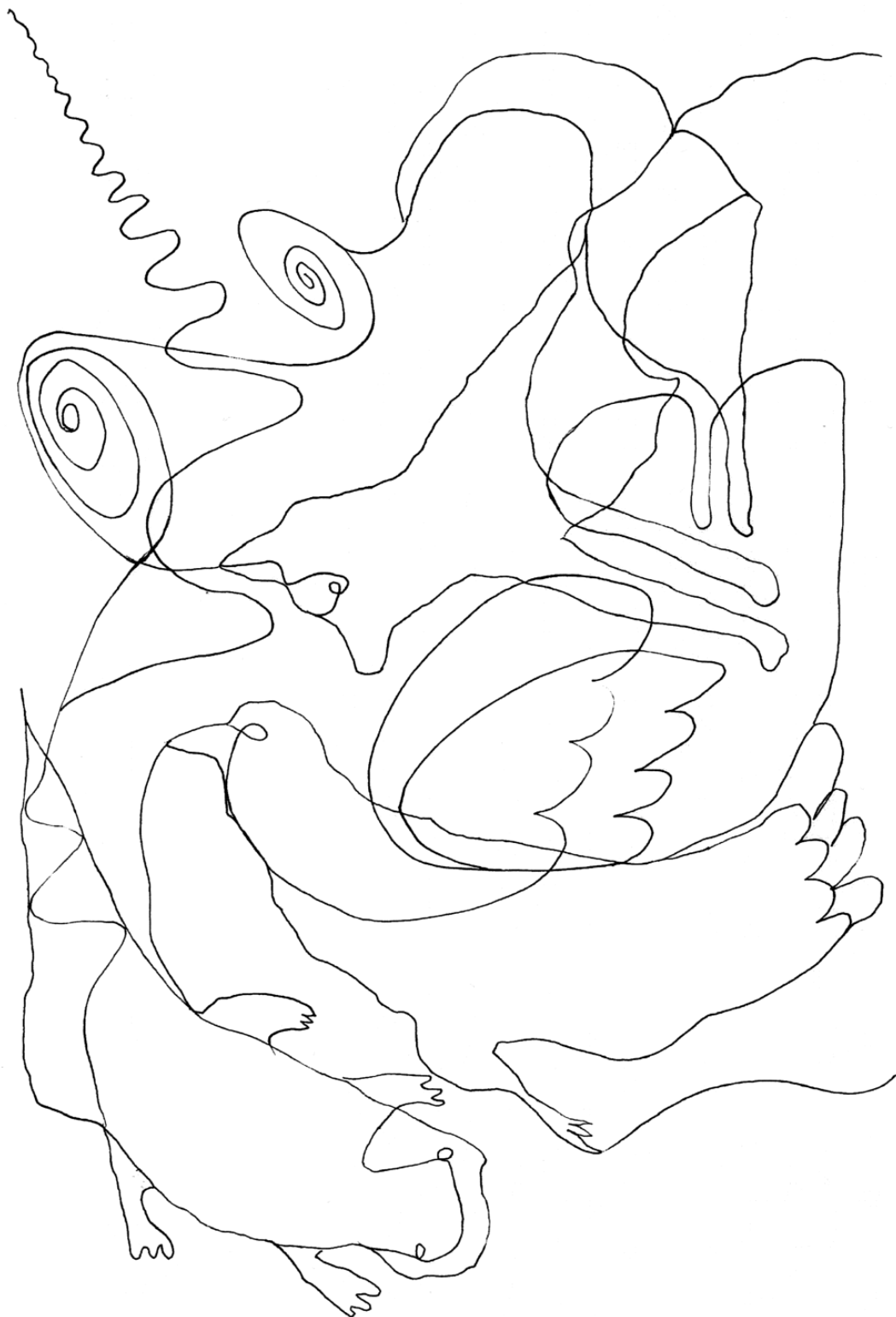


イラスト © 草野義彦